

## リルケにおける死の問題

### 一

リルケは死を真正面から問題にした詩人である。死を問題にするということは、まず第一に、死の確実性を、つまり、生の有限性を自覚的に問題にすることに他ならない。現代という時代は、物質的には、豊かすぎるほど豊かである。しかし精神的にはどうであろう。貧しくて乏しい時代であると言わざるを得ない。ハイデッガーの言葉を借りて言うならば、「時代が乏しい状態をつづけているのは、神が死んだからというばかりではなく、死すべき人間たちが自らの死すべき定めをほとんど知らず、ほとんど実践できずにいるからである。いまだに人間はその本質の所有に達していないのである。死は歪曲されて謎めいたものになって

友 田 孝 興

いる。苦悩の秘義は蔽われたままである。愛は字ばれていない<sup>①</sup>。それゆえに我々の時代は貧しくて乏しいのである。このような貧しさは、人間が日常的小事に埋没し、大衆的生を漫然と生きる限り、時代から取り除くことはできない。死すべき人間が自己の死すべき定めを自覚し、そしてそこから生まれてくる生の有限性の重圧によって、自己の生に緊張を与え、自己自身の人間としての本質にたち帰ることこそが、現代という時代を生きる我々の急務なのである。次に死が提起する第二の問題は、死期の無規定性ということ、つまり、「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身<sup>②</sup>」であることの自覚の問題である。今を生きる者にとつて、死は未来のものである。しかしその未来が、今この瞬間瞬間に可能な未来であることを我々は知らなければなら

ない。人間は未来を確保し、未来に夢や希望を託すことによつて、自己の存在の輪を大きく完成させようとする気力を持つ。その意味で、未来を保持するということは、人間の生にとつて重要な意味を持つのである。しかし、「まだない」と思っている未来の死が、今の次の瞬間に、そこに「もうある」となったとき、人間はこの生の張りつめた今の一瞬をどう生きようとするのか。この問題に、現実の極限状況をとおして体験的に答えてくれているのが、フランクルの人工の地獄ともいふべき強制収容所記録『夜と霧』であろう。そこに「もうある」未来の死を前にして、残された今の一瞬の生の重さに、人間は、それでもなお、あくまで耐え抜いて、人間存在の意味を問いつづけることでもつて、その生を充たそうとするのか。それとも、耐えることを放棄し、絶望あるいは享樂でもつてその生を充たそうとするのか。死期の無規定性の問題は、このように、生を充たさせるかどうかの重要な問題なのである。

リルケは、その全生涯にわたつて、死ということを問題にしつづけたが、そのことの意味は、人間が人間として生きるとはどのようなことであるのか、ということを問いつづけること以外の何ものでもなかった。それゆえに、我々は死の問題を考察することによつて、リルケにおける生の

問題を明らかにしようとするものである。

## 二

リルケの詩人としての生涯を貫く魂の至奥の要求、それは「重いものを愛し、重いものと交わることを学ぶ」ことであつた。今ここで「重い」と訳した〈schwer〉という言葉は、それと同時に、「難しい、困難な、つらい、苦しい」等の意味を包含する。それゆえに、重いものを愛するということは、つらい苦難を愛するということを意味する。苦難を回避し、できる限り人生を軽快なものにしようとするのが、大衆的生を営む者の常であるが、リルケはこのような生き方とは全く逆の生き方を選ぶのである。というのは、苦悩を友とし困難を愛するという、この人生を「重く取る」(Schwer-nehmen)<sup>④</sup>ということは、リルケにあっては、決して憂鬱や厭世ではなく、物事をその真の重さに従つて受けとること、つまり、疑いや運や偶然で計るのではなく、物事をありのままに「真実に取る」(Wahr-nehmen)<sup>⑤</sup>こと、言い換えるならば、真実を知ることに他ならないからである。

人生は重い

すべての物の重さ以上に。

Das Leben ist schwerer  
als die Schwere von allen Dingen. ⑧

人生が重いのは、そこに真実が詰まっているから重いのであり、人生が苦しいのは、その重い真実を、愛と孤独をもつて誠実に生きようとするから苦しいのである。しかし重い人間存在の真実の意味は、重い苦しい愛と孤独に耐えることよつてのみ開示されるのである。重いものを得るためには重いものをもつて応えなければならぬ。「孤独であることは良いことです。というのは、孤独は重いかからず。……愛することも良いことです。というのは、愛は重いかからず」、と彼は言う。この重い孤独と愛でもつて、彼は人間が人間として生きることの真実の意味を問いつけるのである。

しかし、重い孤独と愛の道は死の深淵に沿つた苦悩の道である。一步その道を踏みはずせば死に至る。しかし、苦悩することを恐れるな。苦悩の重さ、それを大地の重さに返し与えるがよい。

山は重く、海は重い。

Fürchtet euch nicht zu leiden, die Schwere,

geht sie zurück an der Erde Gewicht;  
schwer sind die Berge, schwer sind die Meere. ⑧

とリルケは言う。人間存在の意味を誠実に問いつづけようとする者はみな、重い苦悩の中に「落ちる」(fallen)。

しかしこの落下を、限りなくやさしく

両の手に受けとめるひとりの人がいる。

Und doch ist Einer, welcher dieses Fallen  
unendlich sanft in seinen Händen hält. ⑧

これは、自然の「物たち」から学んだリルケの確信である。果実が木から落ちるように、水蒸気が雨となって空から落ちるように、「物」はみな重くなれば「落ちる」。これが自然の摂理であり、自然の法則である。しかも「物」は必ず中心へ、大地へと落下する。それと同じように、「我々はみな落ちる」⑧。我々は、生を誠実で充たすことによつて、自己の人間存在の本質へと落ちるのである。そして、落ちることによつて真実と出遇うのである。従つて、「落ちる」ということは本質に「帰る」ということに他ならない。リルケは、苦悩に耐えられなくなれば、苦悩の重さを大地の

重さに返し与えるがよい、と言うが、そのこの意味は、苦悩の重さをもって大地の重さに「帰る」こと、つまり重い苦悩をとおすことによって、大地という「大きな生」(das grobe Leben)<sup>⑩</sup>の根源にたち帰り、そこに人間存在の確かな立脚地を定め、そこから常に重い「大きな生」の意味を学ぶことなのである。小さな苗木が、風雪の苦難に耐えながら、重い大地にしっかりと根をはり、大地の重さを吸収することによって大きな重い樹木へと成長するように、我々人間も「大きな生」の大地にしっかりと根をはらなければならぬ。一切の生の根源的存在基盤としての「大きな生」の大地、それは山や海のように重い泰然自若の存在である。我々人間は、この重い大地にたち帰り、大地の重さを、大地が語る真実の意味を、自己の生の抛り所とすることが求められているのである。

### 三

我々は少し遠回りをして、リルケにあっては、「重く」ということが「真実の」ということと同じ意味であり、生を重いもので充たす(真実に生きる)と、それはやがてその重さによって、重い「大きな生」の大地(本質・真実の世界)へ「落ちる」(帰る)のである、ということを見てきた。

そこで今度はこの「落ちる」ということを、「死」という観点から眺め、重い大地を抛り所としなければならぬことの意味を明らかにしてみよう。

我々は先に、大地を「大きな生」の根源と規定したのであるが、なぜ「大きな」いのちなのか。それは、生の領域のみならず死の領域をも包摂するからである。つまり、自然界にあっては、生と死の二つの領域を貫き流れる「大きな生」の循環が、大地を根源にして行なわれている。生と死、上昇と落下、この両者を同時的に同等の重みをもって支え、受け容れるがゆえに、自然のいのちは「大きな生」なのである。自然界には、「此岸もなければ彼岸もない」あるのは大きな統一だけである<sup>⑪</sup>。

しかし、生きている者たちはみな犯す、

あまりにも強く区別するという誤ちを。

Aber Lebendige machen

alle den Fehler, daß sie zu stark unterscheiden.<sup>⑫</sup>

本来あるのは、生と死を全体的に包む「大きな生」の統一だけであるのに、我々人間は、自己の生がいつこぼされるかもわからないような「幸福の危険なグラス<sup>⑬</sup>」として死を

敵視し、生と死とを厳格に「區別」し、生から死を排除している。

死とは我々に背を向けた、我々の光のささない生、側面である。我々は、我々の存在が生と死という二つの無限な領域に立脚し、この二つの領域から無尺蔵に養分を摂取しているのだという、その自己存在の最も大きな自覚をなすべく努めなければならない。<sup>⑤</sup>

死を生から排除するのではなく、死が「生の側面」であることの自覚こそが、我々には必要なのである。

生と死、それらは核において一つのものである。

*Leben und Tod: sie sind im Kerne Eins.*<sup>⑥</sup>

生と死とが根源的には一つのものであるがゆえに、生の重さは死を含む重さであり、死の重さは生を含む重さなのである。死なき生には真の重さがない。生は死を側面に有することによって初めて、生本来の重さを獲得するのである。本来、死は生に固有のものであるのに、我々は小事にのみかかずらわって死の本質的意味を知ろうとはしない。リルケは『マルテの手記』(Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigg) の中、

我々が知るところの最も少ないものこそ、かえって我々に最も固有のものではないでしょうか。……我々は小さなことばかりにかかずらわってきました。我々はもはや我々に固有のものをそれと認めず、ただその極端な大きなあまり、恐れおののくばかりなのです。<sup>⑦</sup>

さのあまり、恐れおののくばかりなのです。と言う。彼にあっては、死は生の固有の本質であって、それゆえに、生が重いのは、死という重い本質が生に内在するからなのである。従って、生あるものがみな「落ちる」のは、生本来の本質に従っているだけのことである。

空中高く上昇した噴水が再び自己自身の中に輝きながら舞い「落ちる」ように、我々人間も、それぞれの生の重さに従って、そしてその重さの応分の輝きをもって、やがて再び自己自身の中へと「落ちる」(死ぬ≡本質に帰る)のである。上昇した生は、必ず自己自身の生の本質(死)の重さをもって、自己自身に落下する。つまり、「落ちる」ということは本来性への還元運動なのである。

大地の中に深く根をはった樹木は、大地から大地の重さ(死)を吸収し、それを「果実」へと結集する。すると「果実」は、その大地の重さをもって、それを大地に返すために、やがてまた大地へと落下する。つまり、大地から生を享けたものはみな大地へと帰るのであるが、それを裏返し

て言えば、大地の本質の一側面である死が、生に内在して地上に出(還相)、再び大地の自己自身の中へと帰って行く(往相)のである。「小さな生」(das kleine Leben)としての地上の個々の一切の存在は、「大きな生」の根源としての大地から、生と同時にその本質である死を分有されている。従って個々の「小さな生」は、「大きな生」そのものの働きである上昇と落下を自己自身の内で繰り返しながら、自己の存在の輪を拡大し、またその故郷である「大きな生」の根源へと、大地の中心へと帰還する。

大地の中心、それは暗黒の世界である。しかし、リルケにとっては暗黒こそが意義深い存在なのである。

私の源である暗黒よ、

私は炎よりもおまえを愛す。

炎は世界を限定してしまう、

ある領域を

輝き照らしながら。

領域外では何ものも炎を知らない。

しかし暗黒は一切を抱いている。

Du Dunkelheit, aus der ich stamme,

ich liebe dich mehr als die Flamme.

welche die Welt begrenzt,

indem sie glänzt

für irgend einen Kreis,

aus dem heraus kein Wesen von ihr weiß.

Aber die Dunkelheit hält alles an sich:<sup>19)</sup>

我々は、炎に照らされた明るい領域のみを世界だと思いついでいるが、それは世界のごく限られた狭小な一面にしかすぎない。我々は暗黒を死の世界の象徴として嫌悪するのであるが、しかし暗黒こそが明るい限定された領域をも包摂する本来の全的世界なのである。ゲーテ流に言うならば、それは「母たちの国」である。そこには生と死を包摂する「大きな生」の営みが静かに行われている。それゆえにリルケは、母たちの暗い「大きな胎内には二つの果実があった。即ち子供と死とが」と表現するのである。生の象徴としての胎内の子供は、暗い母の胎内においてすでに、死という果実を食べながら誕生を待っているのである。

このように、暗黒の世界(大地の中心)はリルケにとっては、単なる生の終了としての死滅の世界ではなく、生と

死とが一体となって統一的に生動する重い「大きな生」の世界である。「小さな生」としての地上の個々の存在はみなこの重い「大きな生」の世界を抛り所として、生本来の眞実の重さがあるがままに担い受け、必死で独自の固有の生を日々に営んでいる。少しでも手を抜けば、すぐに生は死に転じてしまう。なぜなら生の本来の重さは自己の内に死を内包する重さだからである。ところが近代の間は、自己の生を軽くするために、自己の生の内部から、生の本質的な重さをなす死を排除してしまったのである。この死の排除（それは同時に神の排除）は、リルケにとっては、人間の犯した根本的な誤謬であった。というのは、それによって、いわゆる科学的・客観的「進歩」というものが世界の中心的重大事になってしまったからである。しかし、我々の世界は、たとえどんなに装って見たところで、死や神によって最初から、しかも決定的に凌駕されているのだ。<sup>②</sup>

このことを明確に証するのが大地から「大きな生」を享けている自然である。自然は我々人間がなしとげた死や神の排除には一切関知せず、それでいて生き生きと、生と死を呼吸している。つまり、

一本の木に花が咲けば、そこには生の花と同様に死の花も咲く。<sup>②</sup>

死あるものはみな、死を包含する重い生を生きるのである。生あるものはみな、死を包含する重い生を生きている。我々人間もこの重い「大きな生」の大地にしっかりと立脚し、生本来の重さに、いのちの続く限り耐えなければならぬ。曖昧な日常の共同性の中で生を軽化するのではなく、孤独な忍耐によって重い眞実の生を担い続けなければならぬ。「忍耐こそがすべてである」<sup>②</sup>。これこそが、リルケの自己自身に対する、そしてそれは同時に我々現代人に対する、心からの叫びなのである。

#### 四

しかし現実の社会状況はどうであろう。近代人は、人間としての生の意味を見出そうとする中で、生の意味を傷つけるものとして、死や神を生から排除してしまった。このことは、人間の独立という点においては、それなりの意味をもつものであった。しかし、この神や死の排除・軽視が、実は結果的には、生の軽視という状況を生み出すに至っている。

では、どうしてこのような状況が現象するのであろうか。それは神や死が排除された生の中心に安楽（大衆性）と科学技術（画一性）が席を独占するようになったからである。

自然の中の生あるものはみな、神性の働きとしての法則に従い、死を内に含む重い生をあるがままに誠実に担い受け、それぞれ独自の固有の生を営んでいる。ところが人間は、重い苦難の生を回避し、「幸福」が「まじかに迫りつつある損失の性急な先触れ」であることをも知らずに、幸福の眩惑の中へと身を投じ、できる限り人生を軽快化しようとする。つまり、我々は平均化された人間集団としての大衆の中に埋没し、組織の中に安住し、安楽な日常的・非本来的共同性に墮順して身の保全をはかると共に、時代精神を象徴する「軽・薄・短・小」の画一的大量生産を喜びをもつて受け容れることによって逆に自己の固有の生を画一化し、空洞化してしまっている。この非本来的・共同的・大衆化と画一化によって、人間の生はますますその固有性を喪失し、物質化してゆく。そしてその必然的帰結として生の軽視という状況が現象するのである。

現代という時代は科学技術を駆使した大量生産の時代である。しかも生産品はみな画一化している。従って、ある物が悪くなればすぐに他の同じ物と取り替えがきく。つまり物の大量的画一性は必然的に代理可能性を自己の本質とするに至るのである。ところが、この物質面で妥当する代理可能性の原則が、人間が物質化する（大衆化と画一化に

よって自己本来の固有の生を喪失する）ことによって、人間社会にも導入されることになる。

ある人の仕事を他の人が代理して処理するということはよくあることであるが、この一者を他者で代理させることが可能であるという人間の代理可能性を、人間の物質化の中で極度に推し進めて行くと、死の代理可能性に到達する。誰が何人死のうと一向にかまわない。また別の誰かにその代理をさせることができる。このように考えることは、人間の最大の冒瀆的行為であるが、しかし現実には、このような行為がいたるところで起こっている。物質の大量生産に呼応するかのような死の大量生産。戦争による殺戮こそはまさにそれであろう。

本来、代理することも、代理してもらうこともできないのが死である。ところが人間は、この冒瀆的な死の代理可能性に道を拓く行為を日常的にしているのである。つまり、人間は他人の死を一つの事件として体験し、そのことによって自己の死の確実性を承認するのであるが、しかしその承認も、「いつかは、しかし当分はまだない」という曖昧な形においてである。しかも死を一つの外的事件として見ているがゆえに、「いつかは」という死期の無規定性を自分の都合のよいように自己解釈し、他人ならいざ知らず、自分



はまだ、という形において、今この瞬間瞬間に可能な自己の死を、他人の死亡事件で代理させてしまっているのである。このことは、死が生内部から排除され、生の外部的存在となり、生の外部から突然やってくる固有性のない一般的事件になってしまっていることの証左に他ならない。人間は自己の生からその本質をなす死を排除してしまいが、それによって、生はその本来の固有性を失い、一般化し、物質化してしまった。また同時に、死も固有の生から排除されることによって、死本来の意味を失い、一般的な外的出来事としてしか見られなくなってしまう。このことをリルケは『マルテの手記』の中で次のように言っている。

この立派な病院は非常に古く、すでにクローヴィス王朝の時代から、このいくつかのベッドで人が死んでいった。今では五百五十九のベッドで死んでゆく。もちろん工場式だ。こんな大量生産では、個々の死が入念に作られるわけではない。しかしそんなことは問題にもならない。問題は量なのだ。いまの世に、いったい誰が入念に仕上げられた死を高く買おう。そんな者は一人もない。入念な死に方をしようと思えばできるはずの金持でさえ、投げやりに無関心になり始めている。自己自身の死を持

ちたいという願いはますますまれになりつつある。もう少しすれば、そういう死は、自己自身の生と同じように、ほとんど見当たらなくなってしまうだろう。ああ、なにかもが揃っている。この世に生まれてきて、できあいの生を一つ見つけて、それを身につけさえすればよいのだ。この世から去りたいと思う。あるいはそう強いられる。いや、気づかいはご無用。ソコニアナタノ死ガゴザイマス、オ客サマ。人は成り行きにまかせて死んでゆく。病気が運んでくる死を死ぬわけである（というのも、すべての病気が知りつくされるようになって以来、さまざまな致命的な結末は病気がつけるのであって、人間がつけるのではない、ということになっているからだ。従って病人は、いわば何もする必要がないのだ）。

本来、生と死は「大きな生」に支えられた一体のものであるのに、人間はそれを分割し、生から死を排除してしまつた。その結果、このように、生と死の両者が共にその固有性を喪失し、人間はただ、できあいの生を生き、病気が運ぶ病院に備えつけの死を死ぬだけになってしまっている。昔の人は知っていた（知らぬまでも感じていた）、ちょうど果実が果芯を持つように、人は自分の中に、死を持っていることを。子供たちは自分の中に小さな死を、大人

たちは大きな死を持っていた。女たちは胎の中に、男たちは胸の中に、死を持っていた。そして死を持っていた、というそのことが、人に固有の尊厳と静かな誇りを与えていた。

リルケにとっては、昔の人は「誰もがすべて自己自身の死を持っていた」<sup>②</sup>。それゆえにまた同時に、彼らは「自己自身の生」を持っていたのである。人間は、固有性のない、生の外部からやってくる「見知らぬ死」(ein fremder Tod)ではなく、自分の内に「自己自身の死」を持つことによつて、同時に、「自己自身の生」を手に入れると共に、生の尊厳と誇りを獲得するのである。つまり、死の軽視は生の軽視に、死の重視は生の重視に、同時に連関するのである。

## 五

大衆的生に埋没し、「自己自身の生」を喪失してしまっている我々現代人にとって、人間としての本来性を回復する道は、「自己自身の死」を持つこと以外にはない。それゆえにリルケは『時禱詩集』(Das Stunden-Buch)の中で、

おお主よ、各人に自己自身の死を与えたまえ。

各人が愛と意味と苦悩とを経験した、

そういう生から生まれてくる死を。

O Herr, gib jedem seinen eignen Tod.

Das Sterben, das aus jenem Leben geht,

darin er Liebe hatte, Sinn und Not.<sup>③</sup>

という叫びをあげるのである。しかし「自己自身の死」は、重い愛と意味と苦悩とおさなければ得られない。愛と意味と苦悩に充ちた重い「自己自身の生」を忍耐強く担い続けることによってのみ、人はそれを獲得することができるのである。

大衆的生に埋没し、日常的非本来性の中で、思いがけなく外部から人間に襲いかかってくる死、病院での大量生産の死、このような死をリルケは「小さな死」(der Kleine Tod)と呼ぶ。安直な大衆的・平均的世界に生きる者にとっては、時がくれば、ただ「死を死ぬ」だけである。前章の最後のところで引用した文の中に、「子供たちは自分の中に小さな死を持っていた」とあるが、この「小さな死」は自分の「中に」ある死である。つまり、小さいながらも「自己自身の死」である。それに対し、平均化された一般大衆の死は、外部からやってくる「小さな死」である。このような外部的な「小さな死」を死ぬ限り、人間は人間としての自

己の本来性を回復することは不可能であると言わなければならぬ。そこで我々人間にとっては、この非本来的な「小さな死」をまず自己自身の「中に」引き入れ、愛と意味と苦悩によって、小さな「自己自身の死」を「大きな死」(der grobe Tod)<sup>②</sup>へと「仕上げる」課題が与えられているのである。そこでまず『神やまの話』(Geschichten vom Lieben Gott)の中にある死に関する話を見てみよう。

昔、お互に愛し合う夫と妻がいた。二人の家には、夫の門と妻の門という二つの門があった。それぞれの門を通してそれぞれの望むものはいってきた。ある時、夫の門の前に死がやって来た。夫はあわてて門を閉めてしまった。幾日かすると、今度は妻の門の前に死が現われた。妻もふるえながら門を閉めてしまった。二人とも門を閉めてしまったので、自然と家にあるだけのものに合わせようとする不自由な暮らしになってしまった。そして貯えも乏しくなり、二人の生活は囚人のような生活になってしまった。そこでついに妻は、門を開けて死を招き入れた。すると死は、これを夫にあげなさい、といって「死の種」を妻に与えて立ち去った。妻はこの死の種が未来にどんな芽を出すか不安であったので、夫には渡さず、それを庭の花壇に植えた。やがて夫も自分の門を開け、二人の家には以前と同

じような光が一杯はいるようになった。翌年の春、死の種は芽を出した。夫はそれに気付いたが妻に尋ねることもなく、妻と一緒にそれを大切に育てることにした。三年目に、その木に、黒い鋭い葉の間から、一輪の青い「死の花」が咲いた。二人は、「その若い花の香りを心ゆくまで吸いこんだ。——しかしその朝からこの世のことはすっかり今までは違ったものになってしまった」<sup>③</sup>。

この大筋からもわかるように、自己の内に死を受け容れ、育て、「死の花」を咲かすということは、人間が死への存在であることの自覚の花を咲かすことであり、この「死の花」を自己の「中に」咲かすことによって、人間の非本来的な生は一変して本来性を回復するのである。マルテの母はマルテに対し、

マルテ、わたしたちはいずれはいなくなってしまうのだけれど、わたしには、みんながうわのそらで、忙しがってばかりいて、死んでゆくというところにろくろく気もとめないでいるように思えるの。流れ星が落ちてゆくみたいで、誰もそれに気づかないし、誰ひとり願いごとをかけようともしないのよ。忘れてはだめよ、マルテ、何か願いごとをかけるのよ。願いを持つことを捨ててしまっではだめよ。それはとても叶えられないでしょうけれど、

いつまでも、一生のあいだでもつづく願いつてあるものよ。そうなると、叶えられることなどもうどうでもよくなるの。<sup>⑤</sup>

と言う。死すべき人間が死すべき定めを自覚し、人間としての存在の輪を完成させようとする願いを持ち続けることこそが、リルケにとっては人間存在の使命なのである。

私は私の生を生きる、

物たちの上に広がりのびゆく輪を描いて。

おそらく最後の輪を完成することはないだろう、

しかし私はそれを試みるつもりだ。

Ich lebe mein Leben in wachsenden Ringen,

die sich über die Dinge ziehen.

Ich werde den letzten vielleicht nicht vollbringen,

aber versuchen will ich ihn.<sup>⑥</sup>

リルケにとっては、本来的に、「死は生の中にある」<sup>⑦</sup>。従ってこの死を「自己自身の死」として自覚し、「大きな死」へと育て上げることこそが、「自己自身の生」を完成させることであり、愛と意味と苦悩によって「自己自身の生」を育て上げることこそが、「自己自身の死」を「大きな死」へと

円熟させることなのである。生の外部にある「小さな死」ではなく、生の内部にある「自己自身の死」の種としての「小さな死」を、「大きな死」へと完成させることに、リルケは人間存在の意味を見出すのである。

ところで、この「大きな死」の完成のためには、愛と意味と苦悩が要求される。これらの重いものを通さない限り、それは不可能なのである。リルケにとっては、愛するということとは、一時的な激しい方向性を失った情熱の炎によって自分を焼き尽くしてしまうことでも、自己の自由奔放な所有欲の充足のために他者の自由を束縛することでもない。もしそうであるとするならば、それこそは罪であって、今さら「愛することを学ぶ」<sup>⑧</sup>必要など、どこにもないことになる。

愛されるとは燃え上がること。愛するとは、尽きない油をもって輝くことである。愛されるとは消え去ること、愛することは持続することである。<sup>⑨</sup>

人間にとって大事なことは、愛されることではなく、愛することなのである。つまり、リルケにとって愛とは生への不断の問いであり、またその問いを真剣に生きることによって、他者との間に絶えず空間と距離と自由を作り出し、自己の生の表面に付着した非本質的迷妄を打ち破ることに

よって、自他の真の重さを知る営みなのである。一般大衆は愛されることに喜びを見出すのであるが、それは「自己自身の生」を放棄した消え去る道である。人間は愛することによって人間存在の真の意味を知るのであり、そこに見出された真の意味を苦悩の持続をとおすことによって生き抜き、それによって自己の存在の輪を完成するのである。それゆえに、生から排除されてしまった重い死を、人間は再び自己の内に復帰させ、死を愛することによって、人間の本来性に目覚めなければならないのである。

## 六

「大きな生」の中に抱かれて、自然の一切のものと同様に、我々人間も「小さな生」を生きている。そしてこの「小さな生」の中に「自己自身の死」の種としての「小さな死」が宿っている。この「小さな死」を「大きな死」と育て上げ、それによって人間は「自己自身の生」を「大きな生」へと完成させることができるのである。そしてこの自己の「大きな生」をもって、やがてはその故郷である大地の「大きな生」へと帰るのである。このような人間存在のあり方を、リルケは「果実の死」とおして我々に教えている。

我々の生に内在する「小さな死」はまだ「未熟な果実」である。この果実を成熟させないがゆえに、我々にとって死が嫌悪すべきものとなり、単なる生の終了でしかなくなってしまっているのである。

我々は永遠と姦淫し、

分婉のベッドがそこにあるのに

自己の死を流産してしまうのだ。

Wir haben mit der Ewigkeit gehurt,

und wenn das Kreibbett da ist, so gebären

wir unsres Todes tote Fehlgeburt. <sup>④</sup>

日常性に埋没している人間は、死の確実性、生の有限性を忘却し、永遠に生きられるかのように生を営んでいる。自己自身の死という子供を産んで、それを立派に育て上げなければならぬのに、秘かに流産によって死という自分の子供を闇に葬ってしまう。我々人間が征服するものは小さなものであり、またその成果そのものが我々を小さくするのである。このような悪循環を断ち切るためにも、我々は生の内にある未熟な「自己自身の死」を「大きな死」へと実らさなければならぬ。そのことが「自己自身の生」の

完成へと至る道なのである。

ところで、果実においては、「終り」としての成熟と「終り」としての死とが一体であるが、「未熟な果実」としての人間の生は、果実のように、死において初めて完成するのであろうか。果実の死は成熟・完成の象徴であるが、しかし、このような時間をかけての生の完成という考えは、それなりの重要な意味を持つのであるが、瞬間瞬間における生の完成の可能性を排除してしまっている。果実においては、未熟という未了は、その果実に付着していて、成熟と共に自己を完成し、自己の生を完了する。しかし人間にとっては、生の「終り」は必ずしも生の完成を意味するものではない。死期の無規定性を自己に有利に解釈し、「まだない」という形で生の持続を考えるなら、人間の死は生の完成から遠ざかってしまう。人間にとって大事なことは、果実の死に学びつつ、瞬間瞬間に「自己自身の生」を充実・完成させなければならぬのである。なぜなら「またない」と思い込んでいる未来の死が、現在すでに、そこに「もうある」からである。「英雄は、早世した人々に不思議なほど似ている。持続は彼の心を誘わない。彼には上昇が存在なのだ。絶えまなく彼は自己を拉っし去って、我々が常に見ているのとは異なる不断の危難の星座の中に踏み入る」の

である、とリルケは言う。人間はたとえ永続の生を願っても、それは許されない。一瞬一瞬、「大きな生」の大地から生を享けたことを喜び、大地の「大きな生」の願いに応えべく自己の生を充実させなければならぬ。「大地よ、これがおん身の願いではないのか、目に見えぬものとして我々の心の中よみがえることが。……変身をほかにして、何がおん身の急迫する委託であろう。大地よ。愛する者よ、私がおん身の委託をはたそうと思う。私をおん身に離れがたく帰依させるには、もはやおん身の数々の春はいらない、——一度の春、ああ、たった一度の春でいい。……いつもおん身の企図するところは誤っていなかった、そして親しみ深い死こそおん身の聖なる着想なのだ。見よ、私は生きている。何によってか。幼時も未来も滅じはしない……みなぎる今の存在が私の心の内にあふれ出る」。漫然とした持続の内に生きるのではなく、死期が無規定性なるがゆえに、今のこの一瞬を人間は充実させ、大地が人間に委託している「大きな生」への願いをはたしてゆかなければならぬのである。

私の成熟と共に

おん身の国も

成熟します。

mit meinem Reifen

reift

dein Reich.<sup>④</sup>

我々人間は、大地から、人間存在としての成熟を願われているのである。そしてそれに応えることによって、大地も成熟するのである。死と生、これは一なる「大きな生」の往還不離の二相であって、大地が我々人間に委託している願いに応え、自己自身の「小さな死」を「大きな死」へと一瞬一瞬に育て上げることが、とりもなおさず、自己の「小さな生」を自己自身の「大きな生」の完成へと至らしめることであり、それが同時に、大地を成熟させることでもあるのだ。これがリルケの一生涯を尽くしての結論であった。『聖書』に、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの果を結ぶべし」(ヨハネ福音書、十二の二十四)とあるが、この真義を明らかにせんとすることこそが、リルケの詩人としての使命であった、と言うことができるであろう。

テキスト及び参考文献

Rilke : Sämtliche Werke, 6 Bde. Insel…… (SW)

Rilke : Briefe, Insel

Heidegger : Sein und Zeit, Max Niemeyer

Holzwege, Vittorio Klostermann

Bollnow : Existenzphilosophie, Kohlhammer

Guardini : Rilkes Deutung des Daseins, Kösel

註

- ① Heidegger : Holzwege, S. 270.
- ② 真宗聖典、八四二頁
- ③ Briefe, 20. 11. 1904
- ④ Briefe, 13. 3. 1922
- ⑤ Briefe, 13. 3. 1922
- ⑥ SW, I, 393.
- ⑦ Briefe, 14. 5. 1904
- ⑧ SW, I, 733.
- ⑨ SW, I, 400.
- ⑩ SW, I, 400.
- ⑪ SW, I, 326.
- ⑫ Briefe, 13. 11. 1925
- ⑬ SW, I, 688.
- ⑭ Briefe, 8. 11. 1915
- ⑮ Briefe, 13. 11. 1925
- ⑯ SW, II, 252.
- ⑰ SW, VI, 862.
- ⑱ SW, I, 519.

- ①<sup>91</sup> SW, I, 258.  
②<sup>92</sup> SW, VI, 721.  
③<sup>93</sup> Briefe, 8. 11. 1915  
④<sup>94</sup> Briefe, 8. 11. 1915  
⑤<sup>95</sup> Briefe, 23. 4. 1903  
⑥<sup>96</sup> SW, I, 717.  
⑦<sup>97</sup> Heidegger : Sein und Zeit, S. 255.  
⑧<sup>98</sup> SW, VI, 713 f.  
⑨<sup>99</sup> SW, VI, 715.  
⑩<sup>100</sup> SW, VI, 720.  
⑪<sup>101</sup> SW, I, 217.  
⑫<sup>102</sup> SW, I, 347.  
⑬<sup>103</sup> SW, I, 347.  
⑭<sup>104</sup> SW, I, 347.  
⑮<sup>105</sup> SW, IV, 357 ff.  
⑯<sup>106</sup> SW, IV, 366.  
⑰<sup>107</sup> SW, VI, 788.  
⑱<sup>108</sup> SW, I, 253.  
⑲<sup>109</sup> SW, I, 225.  
⑳<sup>110</sup> Briefe, 14. 5. 1904  
㉑<sup>111</sup> SW, VI, 937.  
㉒<sup>112</sup> SW, I, 347.  
㉓<sup>113</sup> SW, I, 348.  
㉔<sup>114</sup> SW, I, 706 f.  
㉕<sup>115</sup> SW, I, 720.  
㉖<sup>116</sup> SW, I, 319.